

中国語母語の日本語学習者の発話における 文節末の「て形」のイントネーションと聞き手の反応

須藤 潤 (同志社大学)

1. はじめに

日本語の発話中の文節末の声の高さの変化について、語アクセントによるものとは別に、上昇要素や音の延伸を含む特徴的な韻律を伴うことがある。この種の韻律について、小磯(2014)では「複合境界音調(Boundary Pitch Movement, BPM)」として分析を行い、郡(2016)では間投助詞を伴う場合は「間投助詞のイントネーション」、伴わない場合は「間投助詞的イントネーション」と呼び、分析を行っている。近年、日本語母語話者のこの種の韻律をめぐるのは、その韻律的特徴はもとより、統語構造、会話における話者交替やあいづち、あるいは社会方言的な特徴など、様々な側面から定量的・定性的な研究が行われており、話しことばにおける位置づけが明らかにされてきている。一方で、日本語学習者の習得については、管見の限りそれほど研究は活発ではない。この種の韻律がなくても意味伝達には支障はないことや、社会的に問題があるというこれまでの言説からか、音声指導はもとより、話しことばの指導においても積極的に指導されることは多くないように思う。

そこで、本発表では、日本語学習者の発話にも頻繁に現れる「て形」を手がかりに、文節末のイントネーションの特徴を観察し、聞き手の反応を得るといった会話上の働きに注目しながら、音声や話しことばの指導への導入可能性について考える。

2. 先行研究と本研究の目的

2.1 文節末のイントネーション

本研究で扱う文節末のイントネーションについて、小磯(2014)では、文法的な切れ目とイントネーションとの関係について、BPMが文法的な切れ目の強い節境界に頻出しているとしている。この点について、郡(2016)は、日本語記述文法研究会編(2008:7)に示された「従属節の従属度」の観点から分析を行い、従属度が中程度および低い従属節の末尾に間投助詞(的)イントネーションがつく割合が相対的に多い、としている。

また、この種のイントネーションについて、談話の側面からの指摘もある。郡(2020)は、意味の切れ目をはっきりさせ、そのあとに言う内容や言い方を考えるのに手間取っているときの時間稼ぎに使える、あるいは、話をじっくり聞いてほしい気持ちがあるときに使えるといった、戦略的な指摘を行っている。また、あいづちとの関係性の指摘もあり、Koiso et al. (1998)は、格助詞や接続助詞の上昇下降のF0パターンがあるところでは、聞き手のあいづちがしばしば観察されるとしている。さらに、横森(2024)は、会話分析の手法で「上昇下降延伸」について分析を行い、上昇下降延伸がそこまでの発話構築に「区切り」をつけつつも発言順番を維持するのに利用されていると述べている。

一方で、井上(1997)などでは、この種のイントネーションのうち、特に上昇下降調を「尻上がりイントネーション」と呼び、いわゆるネサヨ運動との関連から社会的には否定的に捉えられているとしている。

2.2 本研究の目的

前節で述べた通り、文節末のイントネーションは、単に韻律的な側面にとどまらず、統語的な側面や、談話の側面との関連が深く、かつ戦略性として使える可能性もあることから、日本語学習者に対する音声および会話における指導項目としての可能性を検討したい。そこで、本研究では、予備的な段階として、中国語母語の日本語学習者(CNS)の発話の中に現れる文節末の「て形」のイントネーションの種類と、そこに出現するあいづちやあいづち的な発話といった相手の反応を観察し、この種のイントネーションを日本語学習者が効果的に使用できる条件について考えたい。

3. 研究方法

3.1 分析の対象

日本語学習者の発話の分析にあたり、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS) (迫田他編, 2020) の「対話タス

ク」を用いた。今回は、中国在住の上級レベルの CNS¹のうち、4名の発話(計124分)を対象に分析を行った。また、同じ「対話タスク」を行った日本在住で東京都出身の日本語母語話者(JNS)の2名の発話(計63分)も併せて分析を行った。

この対話タスクの発話の中にある、文節末の「て形」を対象に、どのようなイントネーションパターンとなって出現しているかを分析した。日本語記述文法研究会編(2008)によると、従属度の低い等位節の形式の1つとして「て形」が挙げられていることから、先行研究の知見から、特徴的な文節末のイントネーションが出やすい形式の1つであると考え、研究の対象とした。そこで、複文の用法の「て形」を抽出すべく、I-JASでは、書字形出現形として「て、で」、品詞を「助詞—接続助詞」と設定して検索の後、複合述語の用法(テイル、テミル、テヤル等)、そして、動詞・形容詞の実質的な意味の薄い連語表現(ニタイシテ、トシテ、ニヨッテ等)を目視で除外している。なお、名詞+デ、形容動詞+デも「て形」の用法であるが、今回は分析から除外している。

3.2 イントネーションパターンの判定と相手の反応

東京方言の動詞または形容詞のアクセント型を考慮した上で、音響分析ソフトPraat(ver. 6.1.51: Boersma & Weenink, 2001)により抽出した F0 曲線や狭帯域スペクトログラムを必要に応じて参照しつつ、発表者の聴覚により、郡(2016)をもとに4つのイントネーションパターン(疑問型上昇調、強調型上昇調、上昇下降調、無音調)の判定を行った。

また、スクリプト上で、調査協力者の発話中の「て形」の直後に相手(調査者)のあいづち、相手の発話があったところを「相手の反応」があったものとしてカウントしている。

4. 結果

4.1 イントネーションパターンの頻度と聞き手の反応

前節で述べた方法に基づいて判定した4名の CNS(CCH07, CCH09, CCH12, CCH16)と2名の JNS(JJJ01, JJJ11)の対話に見られる文節末の「て型」に伴うイントネーションをそれぞれの調査協力者における各パターンが生じた度数として表1にまとめる。なおカッコ内の数字は、「相手の反応」が認められた度数である。

表1 文節末のイントネーションパターンと度数

協力者	無音調	強調型 上昇調	上昇下 降調	不明	合計	協力者	無音調	強調型 上昇調	上昇下 降調	不明	合計
JJJ01	35(31)	9(6)	9(8)	1(1)	54(46)	CCH07	11(4)	3(1)	2(0)	1(0)	17(5)
JJJ11	22(11)	21(18)	8(8)	2(2)	53(39)	CCH09	33(11)	3(0)	38(21)	0(0)	74(32)
						CCH12	19(9)	21(16)	4(4)	5(3)	49(32)
						CCH16	58(23)	2(1)	1(0)	0(0)	61(24)

表1から、まず各調査協力者のイントネーションパターンについて見ると、CNSもJNSも個人差があることがわかる。どの協力者も少なくとも「て形」の4割は、上昇要素を含むような特徴的なイントネーションが伴っていない無音調である。その上で、CCH07やCCH16、JJJ01のように、特徴的なイントネーションをあまり使用しない人もいれば、CCH09のように上昇下降調もよく使う人、CCH12やJJJ11のように強調型上昇調もよく使う人もいる。また、特に、CNSについては、例えば、CCH16の強調型上昇調や上昇下降調のように、ほとんど出現しないパターンもあるなど、出現するパターンの偏りが顕著である。一方で、JNSの2名については、出現頻度が少ないイントネーションはあるものの、一定程度出現している。

もう一点は、相手の反応についてである。JNSの強調型上昇調や上昇下降調については高頻度で相手の反応が見られる。特に上昇下降調ではほとんどすべてで反応が見られる。それに対し、CNSでは、反応が多いとはいえない。上昇下降調でも、CCH12以外は反応が少ない。CCH09は上昇下降調の頻度が高いものの、反応があったのは半数強にすぎない。相手である調査者は全員同じ人ではなく、それぞれの発話に対し同じように反応するわけではないものの、「できる限り自然な会話となるよう、うまく流れを作り、参加者の言語運用をより多く引き出せるように心掛けた」(迫田他, 2020:37)とあるように、調査協力者であるCNSに対しては、発話を促そうと、積極的にあいづちを打ってもおかしくない。では、なぜ、CNSでは強調型上昇調や上昇下降調と相手の反応が共起しにくいのであろうか。

¹ I-JASに含まれているJ-CAT(<https://j-cat.jalesa.org/>)とSPOT(<https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/>)の点数をもとに判断している。前者の「上級前半」より上のレベル(251点以上)でかつ、後者の「上級」(81点以上)のCNSに限定した。対象者は15名であり、そのうちの4名を今回の分析対象とした。

² 今回の分析では、疑問型上昇調に判定されたイントネーションはなかったため、表から除外している。

4.2 文節末イントネーションと発話構造

上昇要素を含む「て形」の文節末のイントネーションが見られた CNS と JNS の発話構造をしてみる。まず、CNS (K:調査協力者) の会話の断片である (1) を見ると、02760-K の 1 発話の中に上昇下降調の「て形」が 3 回出現している。そのうち 2 回（「行って」「乗って」）は直後にあいづちがある。さらに後続の 02780-K の「調べて」には直後に、相手である調査者の発話 02790-C が入り、02800-K の「調べて」には直後にあいづちがある。いずれも上昇下降調で発せられている。この断片にある上昇下降調の「て形」の直後は、相手 (C:調査者) の反応が比較的多く現れている。しかし、02760-K の「降りるじゃなくて」や 02800-K の「家の住所を調べて」のように、上昇下降調であっても直後にあいづち等が見られない例もある。

次に、CNS の発話の構造について見ると、テ形節は比較的短く、単純な構造を持っていることがわかる。2 つ目の「電車に乗って」も、3 つ目の「いつもの駅で降りるじゃなくて」も、「て形」を含む文節にかかる補語は 1 つである。後続の発話でも同様で、「携帯の地図を調べて」(02780-K)、「調べて」「家の住所を調べて」(02800-K) と非常に単純な構造である。本断片に限らず、今回分析対象とした CNS の発話のテ形節は、このように比較的単純な構造を持っていることが多かった。

(1) CCH09: K の怖かった思い出について³

02750-C あ、そう—ですか何が—あったんですか？

02760-K え—と初めて【地名 1】に行った時—〈はい〉その、友達三人、三人で一緒にその、買い物に**行って—↘**〈あ—〉電車に**乗って↘**、〈はい〉といつもの—その—いつもの駅で降りる**じゃなくて—↘**次の駅に降りたんです〈はい〉そして—、その携帯の地図にゆって、え—と

02770-C ん？携帯の地図？

02780-K 携帯の地図、を**調べて—↘**

02790-C あ—スマートフォンですね

02800-K はい〈はい〉、**調べて—↘**〈うん〉家の住所を**調べて↘**、それによって、は、え—**歩いて**かえ、帰ろうと思いましたが〈うんうんうんうん〉そして—そしてその夜に八時ぐらいに**なっ—**黒く**なっ—**一雨も急に降ってきました—

次に、同じ CNS で、上昇下降調や強調型上昇調の直後で相手の反応が比較的得られていた CCH12 の会話の断片 (2) を見る。上昇下降調と強調型上昇調がそれぞれ見られ、直後にあいづちが現れている。こちらも比較的短く単純なテ形節が連なる発話であるが、調査協力者 K (CCH12) は、フィラーの頻発や自己修復により、出身地についてすんなり説明できていない。特に、CCH12 の発話にはこのような学習者由来と思われる非流暢な要素が比較的多く出現している。

(2) CCH12: K の出身地について

02050-C はいどんな所ですか？

02060-K どん、え—、ま、え—山が**あっ—↘**〈うん〉、西は山があ、西に山が**あっ—↑**〈はい〉東はえ—原

最後に、JNS の会話の断片である (3) を見る。02960-K の発話の中には「て形」が 4 か所現れている。そのうち、2 か所が上昇下降調で、1 か所が強調型上昇調で発せられている。これら 3 か所には、直後にあいづちがある。

この発話は、上述の CNS の発話とは異なり、発話の構造がやや複雑となっている。その原因の 1 つは、従属度の低い等位節であるケド節がテ形節と同一発話内に挿入されていることである。さらに「っていう」を介した名詞修飾節も挿入されていることである。(3) のケド節、名詞修飾節がわかるように「けど」「っていう」をゴシック体で示すと、テ形節の前後に頻繁に節が挿入されていることがわかる。「宝塚の裏側を取り上げたテレビ番組を見て、出演者の頑張り感動したので、いつかその舞台を見に行きたい」という内容がすんなりとは話せず、ケド節で前置きを頻繁にしつつ、名詞修飾節で内容を具体化しながら、長々と話し続けているように見える。

(3) JJJ11: K の将来してみたいこと (看護師になって働いて、そのお金で宝塚を観に行くこと) について

02950-C うん、病院行くたびにいつもあ—看護師さんって大変なんだろうなって思うけど〈はい〉ね、ぜひ頑張ってください〈はい〉そして、そして宝塚はなぜ

02960-K {笑} 宝塚はほんとに、ほんとに〈うん〉なん、何で**かっ—**いう理由も私覚えてないんですけど〈うんうんうん〉たぶんテレビを見て**いて↘**〈うん〉であの宝塚のその裏側**っ—**いう〈うんうん〉たぶん、ドキュメンタリーじゃないですけど**っ—**そういう、番組をやって**いて↑**〈うんうんうん〉で、出演者がこういうふう**に頑張っ—**る**っ—**という姿を**見て↘**〈うん〉でその時母と見てたんですけど〈うん〉あ、こ、すごいねこの人たちは**っ—**いうふう**に**〈うんう

³ 会話の断片において、K が調査協力者 (この場合は CCH09)、C が調査者である。あいづちは発話中の〈〉で囲んでいる。「て形」の直後に付している ↘ は上昇下降調、↑ は強調型上昇調で発せられていることを示す。無音調については特に矢印の記号を付していない。

んうんうん) 頑張りがすごっていうこと話してて (うんうんうん) いつかこの、頑張ってる人たちが (うん) 作った舞台見に行きたいねっていう

5. 考察—相手の反応が得られやすい強調型上昇調・上昇下降調の使い方は？

JNS の「て形」には、上昇下降調や強調型上昇調が見られ、その直後にはあいづち等相手からの反応が現れていた。そしてその傾向は上昇下降調で顕著であった。これについては、先行研究で指摘された結果と一致する。一方で、CNS の「て形」にも、上昇下降調や強調型上昇調は見られたが、どちらか、あるいは両方ともほとんど見られない人もおり、調査協力者により「て形」に用いるイントネーションの偏りが非常に顕著であった。そして、上昇下降調や強調型上昇調の直後には JNS と同様に相手の反応が見られたが、JNS ほど顕著には現れていなかった。そこで、上昇下降調や強調型上昇調の「て形」で相手からの反応が多く得られていた発話を見ると、テ形節に加えて、断片(3)のように等位節のケド節や名詞修飾節が挿入されていた。また、断片(2)のように、フィラーや自己修復が多く見られる学習者の発話でも相手の反応は比較的多かった。それに対して、CNS の発話中のテ形節は全般的に短く、比較的単純な構造が多い。

今後、多くの調査協力者について検証する必要があるが、以上の結果から、強調型上昇調や上昇下降調で相手の反応が現れやすい環境に注目すると、発話をどのように続けるか、どのような表現が適切かなど、考えを巡らせながら話している時に強調型上昇調や上昇下降調を使うと、相手の反応が得られやすいのではないかと考えられる。そのため、日本語学習者においても、同じ「て形」を使うのであっても、単純な継起等の用法でこれらのイントネーションを使用しても、高頻度の反応はおそらくなく、長く複雑な発話を続けている時、あるいは、それほど長い発話でなくとも、考えを巡らせながら発話を続けようとしている時にこれらのイントネーションを用いれば、相手の反応を得ながら話し続けることができる、と仮説が立てられそうである。

6. おわりに

非常に限られた話者であったが、CNS の発話に現れる「て形」のイントネーションを分析した結果、イントネーションのパターンが話者によって偏っていたこと、そして、上昇要素が含まれるイントネーションであっても、JNS ほどは相手の反応が得られないことがわかった。相手の反応が得られるのは、長く複雑な発話や、考えを巡らせながら発話を続けようとしている時である可能性が示唆された。今後は、CNS の他の話者、あるいは他の母語の学習者へ対象を広げつつ、イントネーションパターンと発話内の構造、そして相手の反応との関係に注目していきたい。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 JP23K00639 および JP20H05630 の助成を受けたものである。

参考文献

- Boersma, P. & D. Weenink (2001). Praat, a system for doing phonetics by computer. *Glott International*, 5(9/10), 341-345.
- 井上史雄 (1997). イントネーションの社会性 国広哲弥・広瀬肇・河野守夫(編) 日本語音声[2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ 三省堂 pp. 143-168.
- 小磯花絵 (2014). 日本語自発音声における複合境界音調と統語構造との関係 音声研究, 18(1), 57-69.
- Koiso, H., Y. Horiuchi, S. Tutiya, A. Ichikawa and Y. Den (1998). An analysis of turn-taking and backchannels based on prosodic and syntactic features in Japanese Map Task Dialogues. *Language and Speech*, 41(3-4), 295-321.
- 郡史郎 (2016). 間投助詞のイントネーションと間投助詞的イントネーション—型の使い分けについて— 言語文化研究, 42, 61-84.
- 郡史郎 (2020). 日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用 大修館書店
- 日本語記述文法研究会(編) (2008). 現代日本語文法 6 第 11 部 複文 くろしお出版
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬(編) (2020). 日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか くろしお出版
- 横森大輔 (2024). 文節末延伸の韻律的バリエーションとその相互行為上の帰結 定延利之・丸山岳彦・遠藤智子・船橋瑞貴・林良子・モクタリ明子(編) 流暢性と非流暢性 ひつじ書房 pp. 191-207.